

フランスのバカロレアと高等教育の質保証に関する一考察

大場 淳（広島大学高等教育研究開発センター）

日本における後期中等教育は、国が定める基準（学習指導要領）に基づいて行われ、また、使用される教科書は学習指導要領に基づいて編集され、国の認証（検定）を受けている。しかしながら、後期中等教育の修了認定は、原則として各学校（高等学校等）に任されており、修了者の学力は極めて多様である。このため、大学は、それぞれの大学において教育を受けるにふさわしい者を選抜する入学試験を実施し、必ずしも意図するような学生を選抜できないまでも、一定水準の学力以上の学生を確保するよう努めてきた。

しかしながら、大学の数が増えて間口が広がる一方で18歳人口は減少に向かい、多くの大学で入学者の選抜が困難になり、伝統的学生の進学率上昇或いは非伝統的学生（成人学生や留学生等）の増加がない限り、入学者選抜が困難となる大学が増加することは避けられない。更に後期中等教育における規制緩和（総合的な学習の時間の創設や選択科目の増加等）は、その修了者を一層多様なものとし、各大学は、志願者が修得したことを期待することができる知識や技能、すなわち大学入学試験で課すべき内容を想定することが非常に困難になっている。その結果、従来の入学者選抜の有効性が次第に疑問視されるようになり、現在の大学入学者選抜においては、様々な方式が用いられて非常に多様で複雑なものとなっているだけでなく、例えば平成16年度の推薦入学者数は2,047百人に達し、大学入学者全体の34.9%を占めるに至っているなど¹、学力試験以外の入学者選抜方式が大きな位置を占めるようになってきている。

今日、少数の大学を除いて、大学が入学者を一方的に選抜する状況は過去のものとなり、受験者が大学を選択する時代を迎えている。しかし、大学入試が機能しなくなった後の入学者選抜がどのようなものになるかについての道筋はまだ描かれていない。本稿は、こうした日本の状況を鑑みつつ、フランスにおける後期中等教育の修了資格であるバカロレアを取り上げて、入学試験とは異なる後期中等教育と高等教育との接続（高大接続）の在り方を検討するものである。

I バカロレアの概要

1. バカロレアの歴史²

バカロレア(baccalauréat)は、（後期）中等教育の修了を認定する国家免状(diplôme national)である。バカロレアは、中等教育修了認定証であると同時に大学の第一学位に位置付けられており、その取得者には、英語の bachelor と語源を同じくするバシュリエ(bachelier)の称号が与えられる。そして、その資格によって大学への入学が認められるとともに、選抜を行う高等教育機関の入学試験や各種国家試験（公務員採用試験等）に出願することが

1 平成16年10月7日文科科学省報道発表「平成16年度国公立大学入学者選抜実施状況の概要」。

2 この節の記述は、主として国民教育省の資料、Vasconcellos (2004 : 55-56)、その他 Petit Robert や Encyclopédie Microsoft Encarta 99 等の辞書・辞典に拠り、単なる事実関係については出典を省略した。

できる。すなわち、その意味においてバカロレアは少年期(vie adolescente)から大人(âge adulte)への通過儀礼(rituel de passage)であり、かつては、社会的な成功の象徴でもあった(Vasconcellos, 2004 : 55)。

バカロレアの起源は中世大学に遡る。中世大学におけるバカロレアは、リサンス(li-cence)及び博士(doctorat)の両課程の前に位置する学芸学部(faculté des arts)修了時に与えられる大学第一学位であった。しかしながら、革命後に大学が廃止されると同時に、当該バカロレアは消滅することとなった。現在のバカロレアは、1806年に帝国大学(Université impé-riale)³として大学が復活した後の1808年、中等教育修了を認定する学位として新たに制定されたものである。バカロレア取得者は、帝国大学傘下の学部(faculté)へ入学することができ、また、革命後に創設された高等学院(グランド・ゼコル(grandes écoles))への入学試験の受験資格が与えられた。

当初は人文系の試験であったバカロレアは、1821年に自然科学バカロレアが創設され、人文系(ès lettres)と自然科学系(ès sciences)に分かれた。また、当初試験方式は口頭試問だけであったものが、仏語作文又は古典翻訳に関する記述試験が1830年に導入され、1840年にラテン語作文、1853年に現代外国語試験、1864年に哲学の小論文が追加されるなど、後期中等教育の改革とともに試験内容が次第に拡大乃至改編されてきた。この一方で、第三共和制⁴下の諸政府によってバカロレア廃止が検討されたものの、主に高等学校(lycée)教員の反対に遭い実現されなかった(Vasconcellos, 2004 : 55)。また、1980年代にはドバケ高等教育担当大臣が、バカロレアの上に大学入学者選抜導入を図ったが、学生の強い反対運動に遭い潰れている。

2. バカロレアの種類と試験

現在、バカロレアは、従来からの普通バカロレア(général)、主として産業界からの要請に対応して1968年に創設された技術バカロレア(technologique)、そして多数の職業領域を網羅する1985年創設の職業バカロレア(professionnel)の三つの種類に分けられる。どのバカロレアを受験するかは、中学校修了時点から次第に振り分けられていく教育コースによって決定される⁵。

普通・技術バカロレアには複数の系(série)があり、更に各系は、複数のコース(voie) (普通バカロレアの場合) 又は専門領域(spécialité) (技術バカロレアの場合) に分けられる。例えば、普通バカロレアには、自然科学、人文科学、社会科学の三つの系があり、その中の自然科学系には、数学、物理・化学、生命・地球科学、工学の四つのコースがある。バカロレアの種類とそれぞれの系(職業バカロレアについては専門領域の例)を表1に、普通バカロレア・自然科学系の試験を表2にそれぞれ示した。

3 帝国大学は全国の大学組織を統轄する国の機関であり、実際の教育は、全国を大学区(académie)に分けて、各大学区ごとに独立した神学、医学、法学、理学、文学の5学部を置いて実施することとされていた。

4 1870年～1940年のフランスにおける共和国体制。

5 中学校修了時点で、普通・技術コースと職業コースに振り分けられ、更に前者は、高校一年次修了時点で普通コースと技術コースに振り分けられる。大場(2004a : 372)の図1参照。

表 1 バカロレアの種類と系等

種類/創設年	系（専門領域）	説明
普通バカロレア (baccalauréat général)/1808	<ul style="list-style-type: none"> 自然科学系(S: scientifique) 人文科学系(L: littéraire) 社会科学系(ES: économique et sociale) 	主に大学や専門高等教育機関など長期の高等教育機関を志望する生徒を対象としている。
技術バカロレア (baccalauréat technologique)/1968	<ul style="list-style-type: none"> サービス産業系(STT: sciences et technologies tertiaires) 工業系(STI: sciences et technologies industrielles) 化学系(STL: sciences et technologies de laboratoire) 医療系(SMS :sciences et techniques médico-sociales) 農産系(STPA: sciences et technologies du produit agroalimentaire) 農環境系(STAE: sciences et technologies de l'agronomie et de l'environnement) 舞台芸術系(TMD: techniques de la musique et de la danse) ホテル業系(Hôtellerie) 	主として職業人養成を目的としているが、高等教育（主として短期高等教育）への進学をも目的に含んでいる。このため試験は、職業試験と普通試験の二つの領域から構成される。
職業バカロレア (baccalauréat professionnel)/1985	各種事務、製造業、サービス産業、建設業などの諸職業分野について、様々な職業資格につながる専門領域(specialité)がある。	一種の職業資格と考えられているが、他のバカロレア同様高等教育進学資格が与えられる。

表 2 普通バカロレア・自然科学系の試験⁶

	科目	係数	試験方法	時間	備考
必修科目試験	仏語	2	筆記	4 時間	
	仏語	2	口述	20 分	
	数学	7 又は 9	筆記	4 時間	専門の者は係数 9。
	物理・化学	6 又は 8	筆記及び実践	3 時間 30 分+1 時間	専門の者は係数 8。
	生命・地球科学 又は工学	6 又は 8 4+5	筆記 筆記及び実践	3 時間 30 分 4 時間+3 時間	専門の者は係数 8。
	歴史・地理	3	筆記	4 時間	
	現代外国語 1	3	筆記	3 時間	
	現代外国語 2 又は地域語	2	筆記	2 時間	
	哲学	3	筆記	4 時間	
体育・スポーツ	2	定期試験			
専門科目試験	数学 又は物理・化学 又は生命・地球科学	2	口述	30 分	自己の専門と同じ科目を選んだ際は、必修科目試験に統合する。
	体育・スポーツ追加試験	2	定期試験		体育・スポーツが専門の者は必修。
	指導付個別課題学習 ⁷	2	口述	3 人のグループで 30 分	選択した者のみ対象で、平均点以上のみが 2 倍に考慮される。

6 農業省の学校修了者のみを対象とした試験は省略した。

7 travaux personnels encadrés (TPE)。2000 年に導入された学習活動で、生徒の自律性や課題解決能力等を養うことを目的とする。教員の指導の下で、生徒が自己の興味や課題意識等に基づいて特定の課題を選択し、複数の教科の領域にわたって調査等を行い、報告書等の形で仕上げる。

	科目	係数	試験方法	時間	備考
選択科目試験	現代外国語		口述又は筆記	20分又は2時間	2科目まで選択できる。 10以上の点のみが考慮され、第一選択科目（一つしか選ばない場合も含む）については、2倍に考慮される。
	地域語		口述	20分	
	ラテン語		口述	15分	
	古代ギリシャ語		口述	15分	
	体育・スポーツ		定期試験又は集中試験		
	芸術（音楽等から選択）		口述	30分	

バカロレアの試験は各教科20点満点で採点され、係数処理等がなされた後、平均10点以上で合格となる。また、成績優秀者には合格だけでなく、獲得平均点数に応じて「秀(très bien)」（平均16点以上）、「優(bien)」（平均点14点以上16点未満）、「良(assez bien)」（平均12点以上14点未満）の成績評価(mention)が与えられる。なお、不合格の場合でも平均点数が8点以上の場合は追試験を受けることができるが、その場合は成績評価は与えられない。

3. バカロレアの発展

(1) 合格者数の増大とバカロレアの大衆化

バカロレア合格者数は、1980年代後半からバカロレア試験志願者増大に伴って急激に増大してきていたが、1989年の教育基本法第3条でバカロレア合格者を各世代の8割とすることが目標として設定されたことは、その傾向に拍車をかけることとなった（図1⁸）。

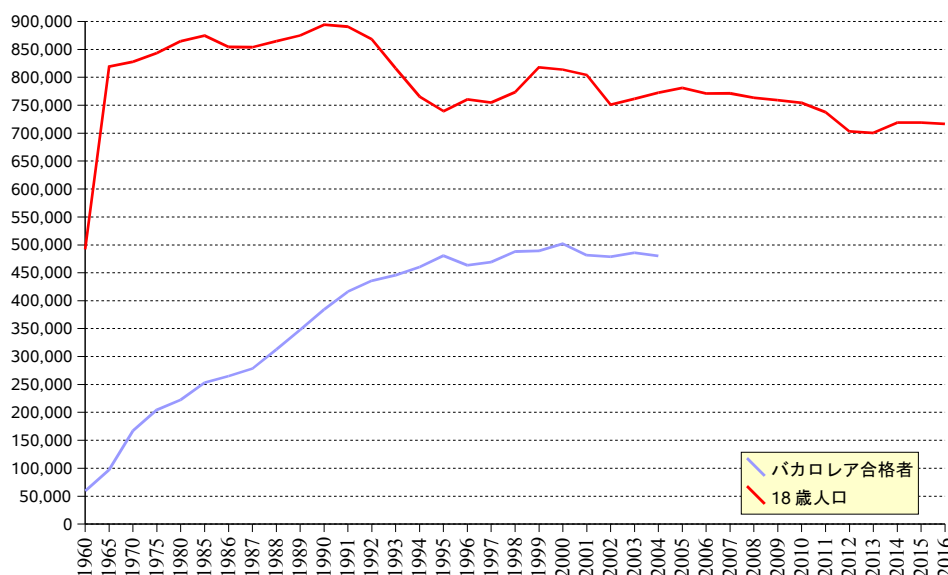


図1 バカロレア合格者数と18歳人口

1990年代以降、18歳人口は長期的には低落傾向にあるが、短期的には増減が見られる。その間、例えば1990年代前半は18歳人口が一貫して減り続けたものの、志願率の向上に

8 18歳人口数は、1998年まではINED統計に基づき、1999年以降は、1998年のデータに基づいて各年に18歳に到達する予定の者の数値を用いた。また、バカロレア合格者数は国民教育省の統計データに基づく（以下の図について同様）。

支えられてその期間もバカロレア合格者は増加し続けた。そして、1990年代後半以降は概ね18歳人口の推移に準じてバカロレア合格者が推移してきており⁹、志願者の上昇はほぼ上限に達した観がある。

この拡大傾向は、3種類あるバカロレアのいずれにおいても見られ、1980年代後半は普通バカロレアにおいて顕著であった。普通バカロレア合格者数は、1990年代にはやや漸減傾向を示したが、技術バカロレア及び職業バカロレアの合格者数は1990年代も増え続け、2000年代に至って初めて安定乃至漸減傾向を示すこととなった(図2)。その結果、現在、全体の合格者の半数近くは普通バカロレア以外のバカロレア合格者以外で占められる(図3)。かつては社会的成功の象徴であったバカロレアは、その規模の拡大とともに大衆化し、現在では社会に出るに当たっての基礎的な資格となっていると言えよう。

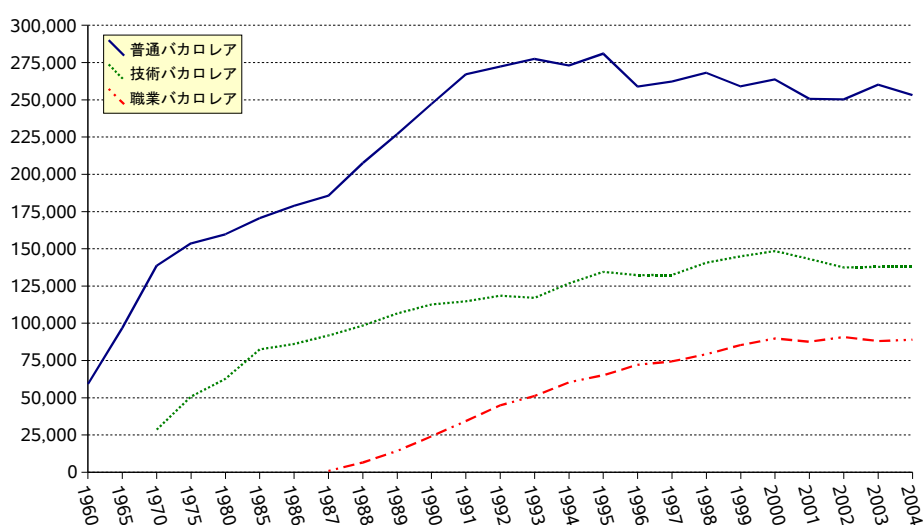


図2 種類別バカロレア合格者数

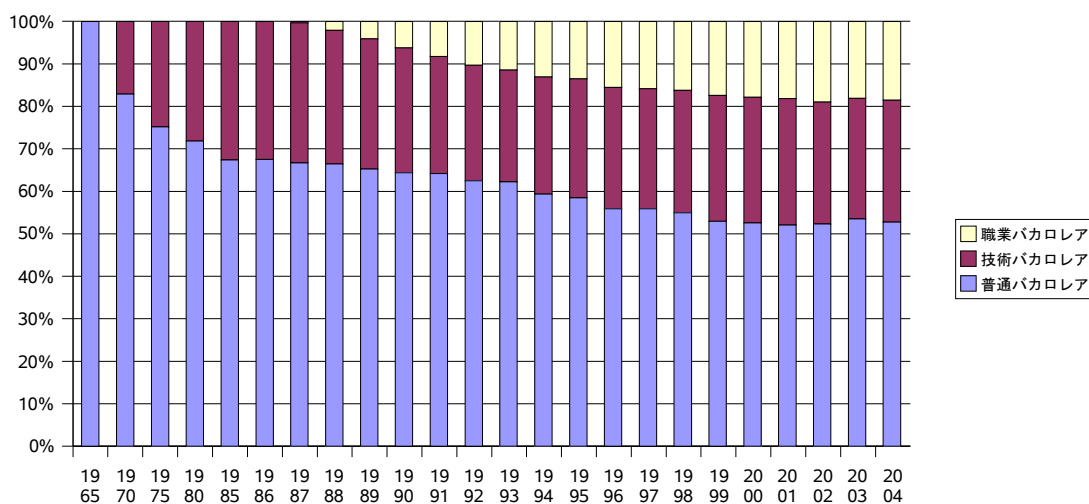


図3 バカロレア合格者の種類別比率

9 1995年から1996年にかけて一時減少しているのは、職業教育への振り分けを推進した1992年からの進路指導(orientation)によるとされる(Mission d'information sur l'information et l'orientation des étudiants des premiers cycles universitaires, 1996 : I-A-1-a)。この進路指導によって、より多くの中学校修了者が普通・技術コースではなく、(職業)バカロレア取得が少ない職業コースへと振り分けられた。

(2) バカロレア試験の合格率

上に述べたバカロレア合格者数増加の理由としては、該当年齢人口¹⁰の増加（1980年頃まで）、高等教育への進学希望率の上昇、試験合格率の上昇等が挙げられる。このうち、試験の合格率については、1980年代から1990年代にかけて上昇傾向にあり、近年は8割前後で推移している（図4）。こうした合格率の上昇に対しては試験が易しくなっているとの批判もあるが¹¹、国民教育省は一貫して試験水準は維持していると主張している¹²。

バカロレアの種類別では、2000年前後までにはほぼ同様に増加してきたものが、それ以降は普通バカロレアに合格率の向上が見られるのに対して、技術・職業の両バカロレアの合格率は漸減傾向にあって、この普通と技術・職業の二つのグループの間に乖離が認められるようになってきている（図5）。なお、いずれのバカロレアにおいても、近年、女子の合格率は男子のそれを上回っている¹³。

他方、バカロレア合格者数が増えた結果、該当年齢人口に占めるバカロレア保有者(bachelor)の割合は、1990年代後半以降6割を超えた値となっている。ただし、その割合は1990年代後半以降ほとんど変わっていない（図4）。

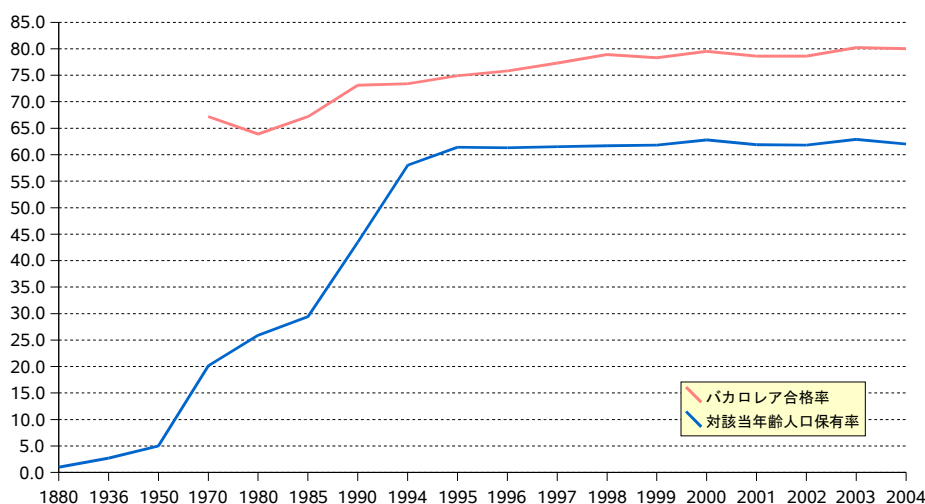


図4 バカロレアの合格率と対該当年齢人口保有率

- 10 普通バカロレア及び技術バカロレアに関しては17~23歳、職業バカロレアに関しては18~24歳の者の数。両者間の1年の相違は、後者に至る課程が1年長いことに基づく。
- 11 初めて合格率が8割を超えた2003年の試験について、同年7月13日付ル・モンド紙は、教員のストライキ等を理由として、複数の試験員が寛大な採点を行ったと述べていることを伝えている。
- 12 例えば、2003年7月12日付ル・モンド紙。
- 13 例えば、2004年の合格率は、普通、技術、職業、全体の順で、女子が、84.4%、78.5%、78.5%、81.8%であるのに対して、男子は、79.9%、75.3%、75.6%、77.4%である。

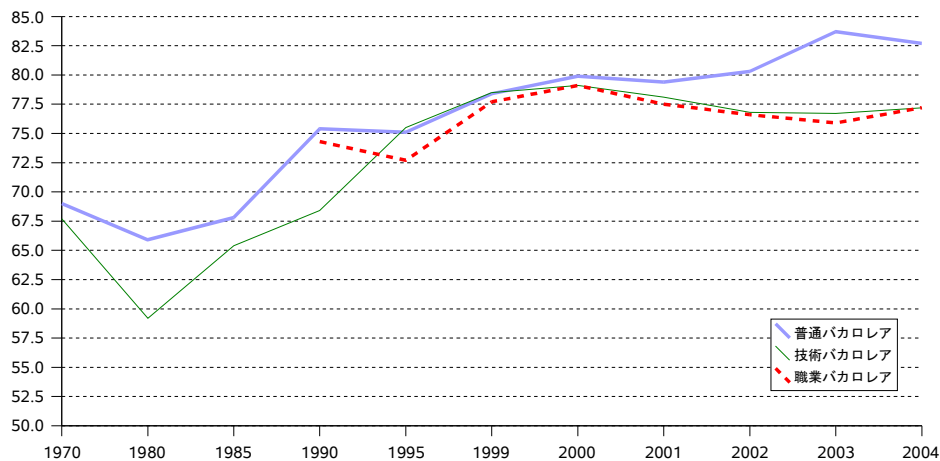


図 5 バカロレア種類別の合格率

II バカロレア取得後の高等教育進学と大学での就学状況

1. バカロレア取得後の高等教育進学状況

バカロレア取得後の高等教育機関への進学率は、近年、8割程度で推移してきている(図 6¹⁴)。各高等教育機関別の進学率の合計値は、1995年に9割近くまでに達したが、それ以降2000年まで、主として技術バカロレア合格者の大学(IUT¹⁵を除く)への進学率低下¹⁶によって減少が続いた。

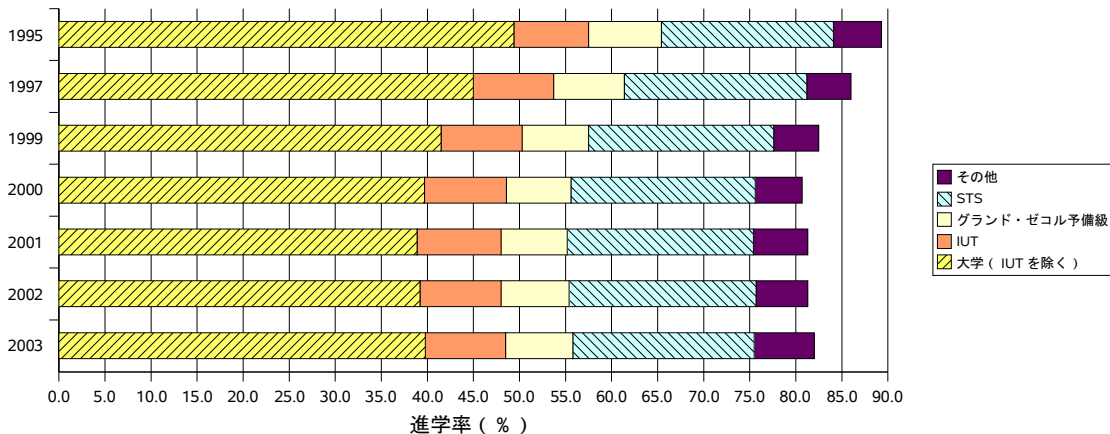


図 6 バカロレア取得直後の高等教育進学状況の推移

出典：DEP, 2003/2004a

技術バカロレア合格者の進学率低下は、主としてインターンシップの増加によってもた

- 14 高等教育機関への多重登録者がいるので、実際の進学率は、グラフで示されている数値を下回る。例えば、2003年の普通バカロレア合格者の進学率の合計は104.2%である。
- 15 大学内に付置される技術短期大学部(institut universitaire de technologie)。大学の通常の課程と異なって、入学者の選抜を行う。高等学校に付設される高等教育課程である高級技術者養成短期高等教育課程(section de technicien supérieur : STS)と並んで、短期職業高等教育を提供している。
- 16 技術バカロレア合格者の大学 (IUTを除く) 進学率は、1995年に56%であったが、2002年には47%に低下した。

らされたと考えられ、リヨン大学区の調査によれば、2001年の技術バカロレア合格者のうち21.0%は進学せず、そのうち半数以上の11.3%は長期のインターンシップ(alternance/formation par apprentissage)に従事した (Fourcade & Haas, 2002 : 11)。

三つのバカロレア取得後の進路は、それぞれの性格の相違から大きく異なっている。普通バカロレア取得者のほぼ全員が高等教育に進学するのに対して、技術バカロレア取得者の進学率は8割弱であり、職業バカロレア取得者で高等教育機関に進学する者は2割強に留まっている (図 7)。また、機関種別毎に入学者の構成を見た場合、大学 (IUTを除く) とグランド・ゼコル予備級は、普通バカロレア合格者が多数を占めている。特にエリート養成コースであるグランド・ゼコル予備級への進学者のほとんどは普通バカロレア合格者であり、職業バカロレア合格者はほぼ皆無である (図 8)。

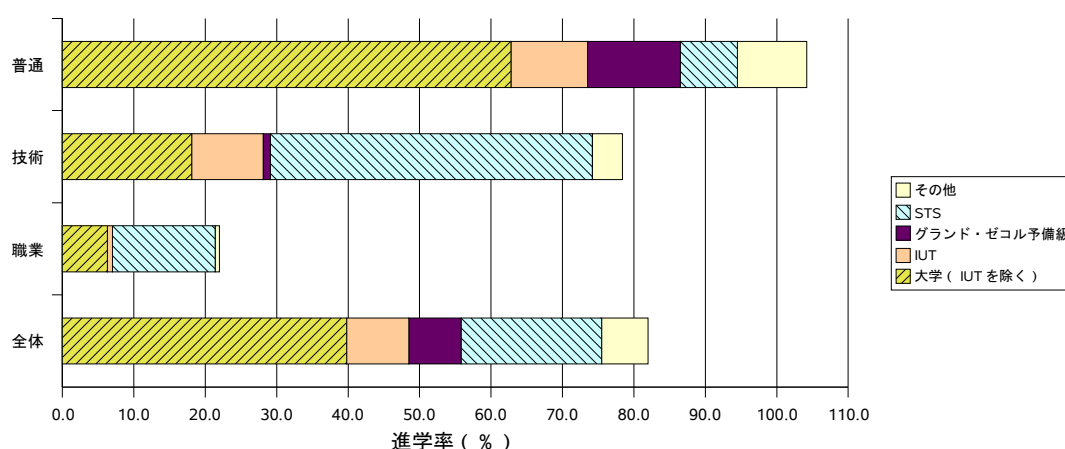


図 7 バカロレア種別の取得直後の高等教育進学状況 (2003年)

出典 : DEP, 2004a

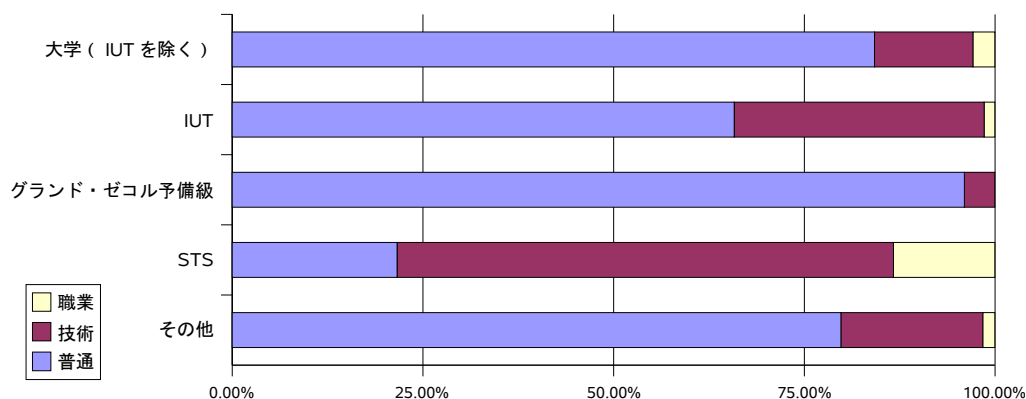


図 8 高等教育機関別のバカロレア種別出身者構成比率 (2003年)

出典 : DEP, 2004a

2. 大学における就学状況

次に、高等教育機関のうち、入学者の選抜を行わない大学 (IUTを除く、以下断りが無い限り同じ) に進学した者の就学状況について見てみることにしたい。グランド・ゼコル予備級、IUT、STSが入学者の選抜を行って、実施する教育に適した者を選んでいるのに対して、大学への進学は原則としてバカロレアに合格することによって認められ、専らバ

カローレアが大学へのいわゆる「入口管理」を行っていると考えられるからである。

大学へ進学した者が学習するのは、通常、大学教育の第一期に当たる大学一般教育課程（DEUG 課程）である¹⁷。DEUG 課程は2年であるが、この課程において多くの学生が困難状況に陥ることが知られている（大場, 2004a : 374）。DEUG 課程は、一年次終了時の試験に合格しなければ二年次に進級ができない制度になっているが、2001年の一年次終了時の試験に合格した前年入学者は44.8%に留まり、28.2%は留年し、残る27.0%は他に進路変更したり学業を放棄するなどして中退することとなった。また、留年者¹⁸を含むDEUG 課程の最終的な合格率は四分の三程度で、2002年の最終合格率は75.7%であった（DEP, 2004a）。

この数値は、保持するバカローレアによって大きく異なっており、同年の最終合格率は、普通バカローレア保持者が81.9%だったのに対して、技術バカローレア保持者は39.3%であり、職業バカローレア保持者に至っては合格率は16.8%にしか過ぎない。この差は、第一期後の課程であるリサンス等の第二期に進級する者に関して更に拡大する。すなわち、第二期へ継続して学習する者は全体では77.0%であるが、その数値は普通バカローレア保持者83.6%、技術バカローレア保持者64.1%、職業バカローレア保持者53.0%と順に低くなり、技術、職業の各バカローレア保持者は、その順に第二期において更に少数派となるのである。

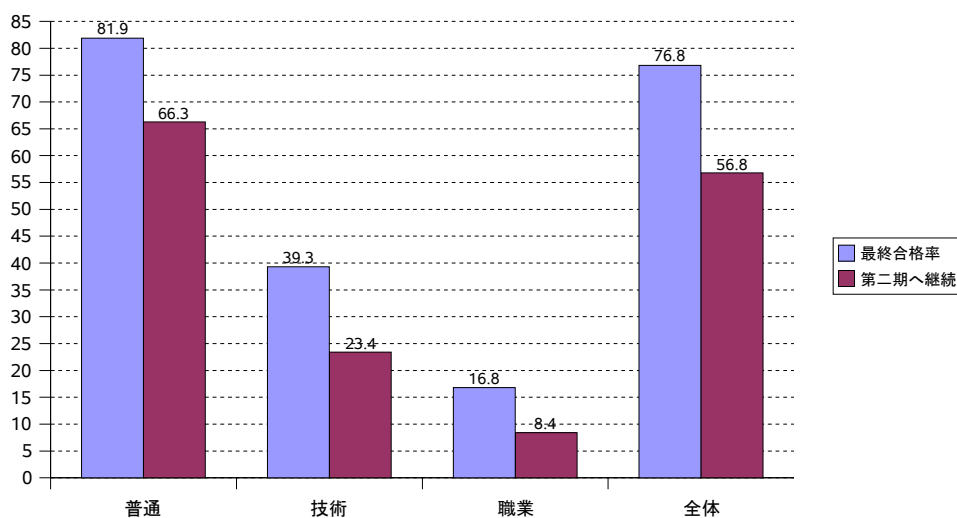


図 9 バカローレア種別の DEUG 最終合格率と第二期への学習継続率（2002 年）

出典：DEP, 2004a

第二期への学習継続率は、近年、普通バカローレア取得者は7割弱、技術バカローレア取得者は四分の一程度、職業バカローレア取得者は1割弱である。後の二者については、1990年代の前半に上昇傾向が見られたが、技術バカローレア取得者については回復傾向にあるものの、職業バカローレア取得者については低いままに留まっている（図 10）。

17 ボローニャ・プロセスの中で、新しい学位構造（LMD）に基づいた大学教育課程が普及してきているが、本稿ではそれ以前の課程に基づく教育の結果を取り上げる。なお、LMDについては、大場（2005a）を参照。

18 DEUG 課程は最長で5年で修了しなければならない。

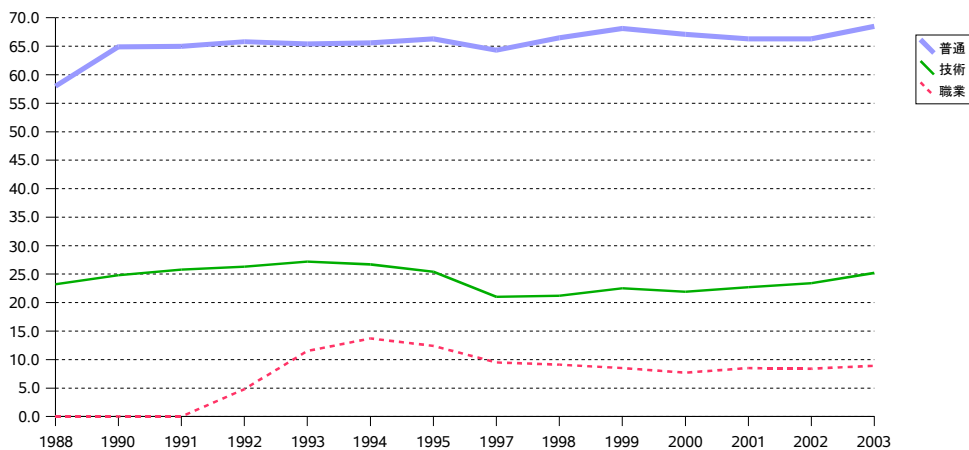


図 10 バカロレア種別の第二期への学習継続率

出典：DEP (2004b : 185) ほか

こうした学習成果や進路の違いは、それぞれのバカロレアの性格を如実に示したものと考えられる。実際、技術・職業バカロレアは、大学教育を受けることを前提にしたものではなく、それが求める要件を満たしているとは見なされていない (Cour des Comptes, 2003 : 326)¹⁹。他のバカロレアと比較しての限りにおいては、以上に示されたバカロレア種別間の学習成果の差は、普通バカロレアが高等教育への適性を保証するものとして現実に機能していると解釈することができる。また、大学人の多くが、技術・職業バカロレア保持者 (特に後者) を無試験で大学に入学させることに対して批判的であることも頷けよう。

以上のような学習困難状況に対して、国民教育省は、学習支援方策を含めて大学第一期教育の改革を図り²⁰、その改善に努めてきた。そうした対策が進められる一方で、次第に、問題は大学教育だけではなく、大学以前の進路決定手続に問題があることが認識されてきた (Cour des Comptes, 2003 : 324)。1996年の国会上院の報告書「よりよく成功する方向に向けて」は、過去になされた提言も踏まえつつ、独自にも調査を行った結果、問題の主たる原因は中等教育段階からの進路指導にあると結論付けている (大場, 2004a : 377)。

次に、普通バカロレアが大学教育の質保証において果たしている機能について、更に検討してみることとしたい。

III 普通バカロレア取得者の入学後の成績

フランスでは、入学後に学生が成功する要因を探るため、幾つか大規模な調査が行われている。ここでは、1996年のバカロレア合格者を対象として継続して行われた国民教育省の調査、並びに学生生活監察局(Observatoire national de la Vie Étudiante : OVE)²¹の2000年の学生調査の二つの調査結果の分析に依拠しつつ、普通バカロレアによる大学教育の質保証

19 このため、国民教育省の政策として、IUTやSTSに技術・職業バカロレア出身者を優先的に入学させることを関係高等教育機関に求めている (MEN (2003 : 49) 等)。

20 第一期教育改革、学生支援方策については、大場 (2004a/2004b) 参照。

21 学生の生活条件並びにそれが学習に与える影響を調査するため、1989年に国民教育省が設置した調査研究機関。OVEは、3年毎に全国の学生を対象とした大規模な調査を行っており、直近では2003年に調査を行った。

の現状について検討することとする。両調査は、DEUGの一年次終了時の試験、学位(DEUG)取得等を成功の基準としつつ、学生の属性、学習歴や学習態様、生活条件等について調査し、成功の要因について分析を加えたものである。

本章では、進学を決めるに際して、社会経済的条件(特に親の収入)を除けば、バカロレアの取得年齢とバカロレアの結果が主たる要因になる(DEP, 2004c: 3)ことに鑑み、これら二つの要因と入学後の成績との相関について両調査結果に基づいて検討する。

1. 両調査の概要

(1) 1996年のバカロレア合格者を対象とした国民教育省調査

1996年にバカロレアに合格した者6千人余を対象として、性別、バカロレアの種類と取得年齢、通学した高校の所在地の種類(都市、農村等)別に調査を行ったものである。この調査からは、入学後の試験合格率が、入学者選抜のあるIUTやSTSとそれが無いDEUG課程との間に大きな開きがあること、バカロレアの種別(普通・技術・職業)によって試験合格率が大きく異なること、普通バカロレア取得者においては、取得年齢が高くなるほど試験合格率が低くなること、DEUG課程では、進学の動機が試験合格率に影響を与えること、女子の成績は男子のそれをSTSを除いて上回ることなどが明らかになっている。

(2) 2000年のOVE学生調査

1999-2000年度の学生を対象として2000年春に実施されたOVEの学生調査は、個人情報(性別、年齢、親の収入や学歴等)、バカロレア以降の学習歴、学習態様(学習量、学習方法等)、現在の生活の状況(住居、親の収入、アルバイトの有無等)について、約26,000人からの回答を得た。そのうち、15,624人分について、DEUGの一年次終了時の試験、学位(DEUG)取得等を成功の基準として、その要因についての分析が行われた。

当該分析(Gruel, 2002)は、成功を左右する主たる要因として、社会的背景(*origine sociale*)、中等教育の成果(*héritage de l'enseignement secondaire*)、学習・社会生活上の規律性(*degré de discipline studieuse et sociale*)、余暇の選択(*sélection des loisirs*)を取り上げて報告している。それによれば、例えば、他の全ての条件を同じくした場合、通常女子が男子の成績が上回っていることについては性差自体は有意ではない²²こと、寮に住んでいる学生、親元に住んでいる学生、賃貸住居に住んでいる学生の間には成績差は無いこと、逆に、中等教育の成果、特定の学習・生活態様(日程管理、図書館での学習、大学食堂での食事等)、アルバイトの有無、両親の収入等に成績が連動していることが示されている。

2. バカロレアの結果と入学後の成績

日本の大学においては、一般的に大学入試の結果と入学後の成績との相関が低いこと、競争率の高い学部ではむしろ負の相関が見られることも少なくないことが知られている(大膳, 2005: 53)。フランスにおいては、既に見たように、普通バカロレア、技術バカロレア、職業バカロレア取得者の間に、大学入学後の試験合格率に大きな開きがあり、バ

22 すなわち、女子に多い行動様式(手帳による日程管理や図書館での学習等)やその他の条件が、女子の成績を上げている。これらの条件が同じである男子と女子では、有意な差が認められない。Michaut (2004: 230)も同趣旨の報告をしている。なお、成績の男女差については、Gruel L. & Thiphaine B. (2004) *Des meilleures scholarités féminines aux meilleures carrières masculines, ou comment s'amorce dans l'enseignement supérieur l'inversion des excellences*. OVE, Paris. に詳しい。

カカロレアの種類と入学後の成績の相関は明瞭である。この成功度の違いは、技術・職業の両バカロレアが大学教育に適したものではないことに鑑みれば当然の結果である。それでは、大学等への進学を前提とした普通バカロレア保持者に関しては、バカロレア試験結果と入学後の成績についての相関はどのようなものであろうか。

ところで、入学試験がある場合、その結果と入学後の成績についての相関を測るに際しての困難の一つは、入学試験に不合格となった者を比較の対象に加えることができないことである。すなわち、調査の対象は、入試に合格した者という同質に近い学力を持った者の中での比較に過ぎないことであり、その点、偏差値で階層化されている日本の大学では、かかる困難は一層顕著に現れると考えられる。そうした問題点は、技術・職業バカロレア保持者を別にしても、普通バカロレアの不合格者は調査の対象とすることができず、また、学年を重ねて行くに連れて退学者が出て行って追跡調査ができない場合があるという点においては、フランスにおいても同様である。しかしながら、同国では、バカロレア試験に合格すれば原則としてどの大学にも入学が認められることから、多様な学力の学生が各教育研究単位(UFR)²³に入学しており、バカロレア試験の結果と入学後の成績の相関について、日本と比べてより広範な比較調査が可能である。

バカロレア試験は、先に述べた通り、20点中10点以上獲得すれば合格であり、成績優良者には「秀(très bien)」(平均16点以上)、「優(bien)」(平均点14点以上16点未満)、「良(assez bien)」(平均12点以上14点未満)の成績評価(mention)が与えられる(10以上12点未満の者は「可(passable)」である)。OVEの調査によれば、他の全ての条件を同じくした場合、バカロレアで良を得た者は可を得た者と比較して、第一期一年次又は第二期の試験合格可能性が約1.5倍であり、この比率は優、秀を得た者ほど高くなる(図11)²⁴。他方、当該報告は第一期一年次を不合格となつて退学した者についても分析を加えているが、その背景として、少ない親の収入(学業を妨げるアルバイトの実施)²⁵、バカロレア取得の遅れに加えて、低いバカロレア成績を挙げている。

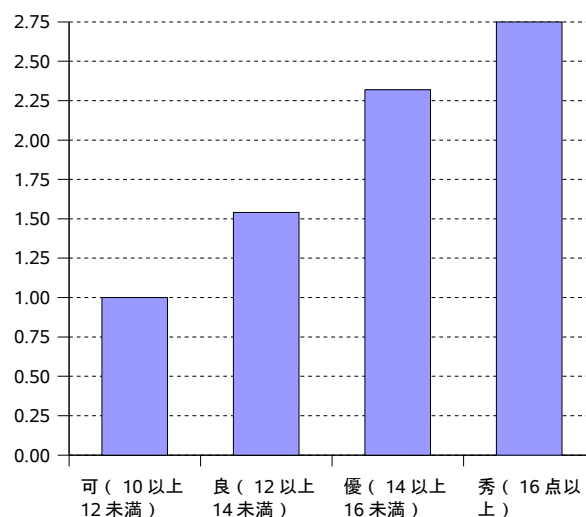


図11 バカロレア成績別の第一期一年次又は第二期の試験合格率(可であった者との比較)(2000年)

出典: Gruel, 2002

3. バカロレア取得時の年齢と入学後の成績

初等中等教育を留年乃至飛び級を行わずに修了した場合、普通バカロレアの試験を受験

23 学問領域毎に設置される大学の基本構成単位である。日本の学部に対応する組織であるが、一般的には学部よりは領域が狭く、また、日本の学部から大学院までに相当する教育を一貫して提供している。但し、博士課程の教育は他のUFR等と連携して提供することがほとんどである。

24 成績評価が付くのは普通バカロレアだけではないが、学生の多数が普通バカロレア保持者であることに鑑みれば、この傾向は普通バカロレアの傾向と見なして差し支えないと考える。

25 親の学歴は、親の収入に比較して、学業成績に与える影響を少ないとされる。

するのは18歳の時点である。飛び級は入学後の成績に有意に影響を与えないとされるが（DPD, 2000）、逆に留年やバカロレア落第等によって遅れて大学に入学した者のDEUG等における成績が芳しくないことが知られている。例えば、前述国民教育省の調査（DPD, 2000）では、19歳未満で入学した者のうち83.4%が2年でDEUGを取得したのに対して、遅れて入った者で2年でDEUGを取得した者は57.9%にしか過ぎない（同：Tableau V）。また、前述OVEの調査によれば、遅れずに入学した者と比較して、1年遅れで入学した者の第一期年次又は第二期試験合格率は74%で、2年以上遅れた者の同比率は65%に留まる。

こうした傾向は、普通バカロレアの全ての系に共通する（図12）。そして、年齢による成績の差は短期間でDEUGを取得する者において顕著であり、バカロレア取得までに遅れた者は、大学に入って更に学位取得まで長い期間を必要とする傾向が認められる。例えば、2002年のDEUG試験において、19歳未満で人文社会系バカロレアを取得して入学した者のうち58.4%の者が2年でDEUGを取得したのに対して、2年以上遅れて入学した者で2年でDEUGを取得した者は29.9%にしか過ぎず、両者の間で二倍程度の開きが生じている。この開きは他の系においても同様に認められる。

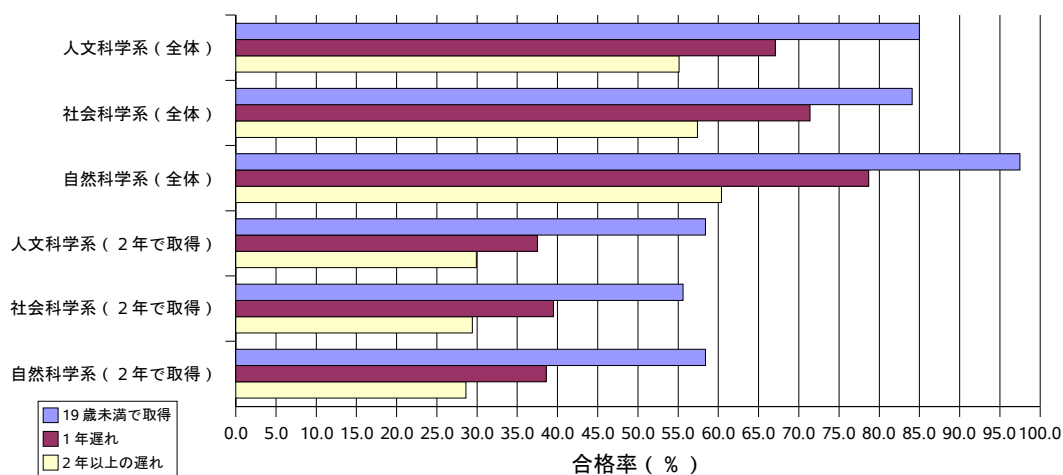


図12 普通バカロレア取得年齢別のDEUG合格率(2002年)

出典：DEP (2004b : 213)

IV バカロレアと大学教育の質保証についての考察

1. バカロレア合格者の規模と水準

現在、各世代に占めるバカロレア取得者の割合は6割を超え、そのうち約8割が高等教育機関に進学し、各世代の進学率は5割程度と考えられている。この数値は、日本の大学・短期大学への進学率に等しく、フランスの高等教育は、日本と同様に、トロウの言うところのユニバーサル段階に達しているか大衆段階の最終局面に位置していると考えられる。

このような高等教育の量的拡大は、日本と同様、学生の学力低下を回避することなくして実現されることは無かった。具体的には、技術バカロレアと職業バカロレア保持者にも、普通バカロレア保持者同様に大学の門戸を開いたことである。当該両バカロレア保持者は、

本来大学教育を受けるにふさわしい教育を受けてこなかったに関わらず、学力の低い者は当該両バカロレア保持者に適切とされる短期職業高等教育（IUTやSTS）から弾き出され、高等教育進学に際しては大学を選ばざるを得ない状況が認められる（大場, 2004a）。この意味では、これら両バカロレアは大学教育を受けることについての質を保証しているとは言いがたく、大学第一期課程における教育上の問題もそこに集中していると言っても過言ではない。

平成11年の中央教育審議会答申「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」は、「資格試験を実施し、それに合格すればどこの大学でも入学できるようにするという考え方については、フランス（...）では、以前からバカロレア（...）と呼ばれる大学入学資格の取得試験を実施し、合格者を原則としてすべて大学に入学させているが、例えば、フランスでは、大学の第1期課程（2年）修了前に毎年約4割の中途退学者を生み出すこととなっている」（第5章）と述べ、バカロレアによる質保証には否定的な見解を示しているが、バカロレアの種別化や成績評価(mention)、高校における学習状況を考慮していない不十分な議論である。

普通バカロレア保持者については、他のバカロレア保持者と比較して入学後の成績が上回るだけでなく、取得年齢によって相違があるものの、当該バカロレア試験結果と大学入学後の成績との間に明確な相関が認められる。全体としては、普通バカロレアの試験は、大学教育を受けるにふさわしい者を選ぶに適切な試験が行われていると判断でき、実際、その適切性について多くの中等教育関係者や高等教育関係者が認めるところである²⁶。

2. 多様な教育内容・手法、評価等の在り方

本稿で取り上げた入学者に関する質の保証に関する事例は、主として入学後の成績や学位取得状況に基づきつつ、その他の変数（過去の成績、家庭の状況、学習態様等）と関連させて検討したものである。しかしながら、大学での試験成績や学位取得は、入学後の教育内容・手法、評価等の在り方によって大きく左右されるものであって、そうした相関を容易に測ることができないのは当然である。

国家学位²⁷を採用するフランスでは、大学教育内容については、国が学位プログラムを認証(habilitation)することによって一定の質保証を試みている。しかしながら、実際の学位プログラムの運用は同じ学問領域でも多分に差があり、それが成績の差となって現れている²⁸。Romainville (2002 : 3-4) は、大学における学習成果の評価手法の第一の特徴は「多様性(hétérogénéité)」にあるとし、「学習成果評価の基礎となる仕組み、手続、難易度、基準の標準化が行われていない。こうした手法の重大な多様性は、評価の信憑性や有効性を損なっている」と述べ、更に、第二の特徴として「不明瞭であること(faible explicitation)」

26 筆者は、2005年4月、大学教員並びに高等学校長を始めとする中等教育関係者にインタビューを行ったが、いずれも普通バカロレアの適切性(pertinence)については肯定的であった。但し、バカロレアに対する批判は少なくない（後述）。

27 大学が提供する教育について、これを修了した者に授与される学位が求める基準に当該教育内容が合致していることを国が確認し、学位の質を担保するという制度。各大学が学位プログラムを設定するに際しては、その都度国から授与権の認証(habilitation)を受けなければならない。国家学位については大場 (2005b) 参照。

28 例えば、生命科学、心理学、経営管理についての大学間比較調査についての Michaut (2004 : 240-244) 参考。結論として、単純な比較は困難としつつも、試験の難易度と大学の教育編成（単位制、半期制等）が成績に多大な影響を与え、また、教授法もある程度影響があるとしている。

を挙げ、成績評価が如何なる手順や基準で行われるかが明らかでないことを指摘した。したがって、評価についての共通の尺度が無い以上、この種の研究には限界があることは否めない。

Michaut (2004 : 245) は、学生の成功を大学間で比較することについて、「大学間のプログラムの相違が非常に大きく、全ての評価（注：大学間の比較のこと）は共通カリキュラムについての事前の研究が必要である」と言う一方で、ある程度は学生の成功が何に依存するかは明らかになっていると述べる。これまでの研究成果を認めつつ、今後における精度向上の必要性を指摘したものと考えられる。

なお、本稿では、学位取得者に対する社会からの評価は考慮していない。大学教育の結果は社会に還元されるのであるから、その観点からの検討は不可欠であるが、この点は更に分析が必要である。

3. 教科間における相違

大学入学者の入学後の成績には、教科間で大きな差が認められる。例えば、2001年のDEUG 課程一年次末の試験合格率は、50.4%の体育・スポーツ科学から30.7%の経営管理まで、領域間に大きな差が認められる。体育・スポーツ科学と経営管理の両者の相違は、前者においては普通バカロレア保持者の比率が高いのに対して、後者はそれが低いことが主たる原因である（大場, 2004a : 374-375）。

しかしながら、合格率や学位取得率の相違は、同じ種類のバカロレア保持者を比較しても認められる。例えば、生命科学、心理学、経営管理について、入学後最初の試験成績を比較した Michaut (2004 : 236) は、生命科学においては入学前の学習成果が試験結果を左右する貢献度が80%近くであるのに対して、心理学においてはそれは50%にしか過ぎなかったとしている（表 3）。

表 3 試験年間平均点の説明変数の貢献度（説明分散率：R²）²⁹

変数群	生命科学	経営管理	心理学
従前の学習成果(scolarité antérieure)	28.6	26.9	16.8
学習態度・学習法(métier d'étudiant)	3.3	6.4	13.3
社会人口的特徴(caractéristiques socio-démographique)	0.2	0.8	0.2
生活条件(conditions de vie)	0.3	0.6	0.7
大学の差異(site universitaire)	2.3	0.7	2.1

出典：Michaut (2004 : 237)

すなわち、生命科学で良好な成績を得るためには、留年せずに普通バカロレア自然科学系に優秀な成績で合格することがほぼ不可欠であって、入学後に学習態度や学習法を改善してもほとんど結果が得られないのに対して、心理学においては仮にバカロレアにおいて優秀な成績を残すことができなくとも、入学後に勤勉に学習に取り組むこと等によって成績の向上が期待できるのである。入学前の進路指導や入学後の学習支援の在り方を検討するに際して、こうした情報は参考となるであろう。

²⁹ Contribution des différentes groupes de variables à l'explication de la moyenne annuelle (en pourcentage de variance expliquée : R²).

4. 学力と社会階層

中等教育までに社会経済的に恵まれなかった子どもは、そうでない子どもと比較して、バカロレアに至るまで様々な不利益を受け、その結果、成績や合格年齢において劣ることが知られている。この点について深く言及することは本稿の目的とはしないが、そういった不利な条件で中等教育を修了した者が、必ずしも有利な条件の中で順調に修了した者と比較して能力において劣るとは限らないことは明瞭である。Michaut (2004 : 229) は、過去の研究も参照しつつ、低い社会階層出身の学生は、高い階層出身の学生と比較して、他の条件が全て同じであれば同じような成績を得ていると述べる。

グランド・ゼコルの中でも最も選抜の厳しいパリ政治学院(通称「シアンス＝ポ」)は、経済社会的に恵まれない地域である教育優先地区(ZEP)の高校出身者を対象とした特別選抜制度³⁰を設け、2001年の新学期より開始した。入学当初学力的には劣っていたZEP出身者の学生は、入学後は他の方式による入学者と比較して同等の成績を収めていることが伝えられている。

バカロレア試験によって必ずしも高等教育に適性のある者全てが選抜される訳ではなく、意欲と能力があるにもかかわらず、選抜から漏れてしまう人が少なからずいることは否定できない。この点は、機会均等や公平性の確保、或いは社会に真に貢献できる人材育成の観点等から従来から問題視されており、シアンス＝ポの特別選抜制度も多くの者に歓迎されているところである。社会階層の差を超えて平等に高等教育への機会を提供しつつ、適性を測ることができるような試験の在り方が求められていると言えよう。

V 結語

1. バカロレアの今後

バカロレアは、現在の制度が創設されてから既に2世紀近くが経過し、その間長きに亘って、学習成果を示すものであると同時に通過儀礼として機能してきた。すなわち、中等教育修了を証するとともに大学入学を認めるものであり、その保持者はある意味で特権的な社会の一員として受け入れられてきたのである。バカロレアは大学制度(*institution universitaire*)の一部であるだけでなく、社会制度(*institution sociale*)の一部であると言われた所以である³¹。20世紀に入ってバカロレアの規模が拡大し、将来の職業を保証するという機能が低下する中で、通過儀礼としての性格は次第に薄れ、今日では社会に同化させるための基礎的な資格としての性格が強くなっている(Danvers, 2003 : Introduction)。

大学教育の質の保証という観点からは、総体としてバカロレアの試験結果と大学入学後の成績の間に強い相関が認められる一方で、当該相関は学問領域や大学間で均一ではなく、大学後の学習態度・手法の改善等によって高い成績を収め易い場合もあることが判明している。ある意味においては、バカロレアによる質保証の限界を示すとも言えよう。Danvers (2003 : Introduction) は、バカロレアが中等教育修了の認定と大学入学の許可という二つの機能を有することから、高等学校教育の実践と大学教育が求めるところの間に葛

30 詳細はRIHEメールマガジンNo.6(平成16年3月1日発行)に掲載された拙稿「フランスのエリート校の新しい入学者選抜制度」参照(<http://rihe.hiroshima-u.ac.jp/viewer.php?i=80>で入手可能)。

31 Piobetta, J. -B. (1937) *Le baccalauréat de l'enseignement secondaire*. Baillièrre, Paris. (Danvers, 2003)

藤があり、その結果、バカロレアに合格することが必ずしも高等教育への移行を保証するものではないと述べる。他方、バカロレアの試験結果は社会階層を反映したものであり、毎年公表される高校別のバカロレア合格率に基づいたランキング(palmarès des lycées)や裕福な家庭しか利用することができない塾等の教育産業の拡大に対して強い批判があるのも事実である。

とは言えども、有資格者が大幅に拡大し大衆化した今日においても、バカロレアは未だに「神話(mythe)」である (Danvers, 2003 : Introduction)。2005年1月12日にフィヨン国民教育大臣から提出された新しい教育法案³²は、定期試験の活用といったバカロレア試験の改革を含んでいたが、バカロレアの価値を低下させるとして高校生の激しい反対活動に直面し、その結果バカロレアに関する改革は断念せざるを得なかった。しかしながら、試験実施に莫大な経費を要することや社会階層を反映するといった問題、更にLMD導入や自律性拡大といった高等教育の質保証に関わる新たな課題等、バカロレアを巡る諸条件はその改革を不可避としていることは確かである。

2. 日本への示唆

最後に、本稿冒頭の課題設定に戻って、我が国における高大接続の在り方について検討を加えてみたい。我が国では、その規模拡大がもたらした高等教育の大衆化によって、多くの大学において、従来その入口を管理していた入学試験が機能しなくなっている。これに対して、大学側からは中等教育、更には初等教育における「学力低下」批判が起こったのは記憶に新しい。多様化する学生を適切に受け入れるためにとられた政策は、平成10年の大学審議会答申「21世紀の大学像と今後の改革方策について—競争的環境の中で個性が輝く大学—」が副題で示すように、競争の中で大学が個性化を図りつつ、学生の能力・適性に応じた教育や支援方策を提供していくことを主眼としていた。この方向は、「大学の機能別分化」を求めた平成17年1月の中央教育審議会答申「我が国の高等教育の将来像」でも維持され、更に明確になったものと受け止めることができよう。

その一方で、平成11年、中央教育審議会答申「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」が出された。本答申は、大学入試を選抜の機会としてではなく、貴重な進路選択の機会として見ることにポイントを置き、従来の入試改革路線ではなく選抜原理の転換を促す政策を提言した意味において画期的と言われた (荒井編, 2003 : 2)。この答申、そして翌平成12年の大学審議会答申「大学入試の改善について」は、大学入試センター試験(センター試験)の資格試験的な取扱いを提言したが、今日でも高大接続の中心に位置しているのは機能不全に陥りつつある大学入試であり、また、入学基準が不明確なことの多い推薦入学やAO入試³³が学生募集の重要な手段となっており、当該提言が実現されるには至っていない。

すなわち、日本においては、国の政策においても、各大学の入学者選抜方針においても、入学する学生に一定の学力を保証する方策が積極的にとられることなく、先に述べたような「学力低下」批判へと繋がっているのである。仮に「学力低下」が事実としても、その原因は初等中等教育のみに帰されるべきではなく、教育行政及び大学の責任も大きいことは言うまでもない。

32 *Projet de loi d'orientation pour l'avenir de l'école.*

33 「進学率が上昇するにもなって、各大学は入学者選抜の基準をむしろ曖昧にする方向へ向かった。推薦入学、AO入試の増加を見れば明らかである。」 (荒井, 2005a : 13)

フランスのバカロレアのように中等教育修了資格と大学入学資格とを一致させることは、我が国の大学の多様性に鑑みれば現実的ではない。しかしながら、バカロレア試験合格を目指してフランスの高校生が学習し、それが高等教育への適性を証していることは見習うべきではないだろうか。例えば藤井（2005：278）は、バカロレアを含む欧州型の入学者選抜制度に関して、中等教育修了試験は「高校教育の学習の達成度を測る全国共通の試験であり、その合格をもって高等教育を受けるに十分だとの判断を下している点にこそ注目すべき」であるとし、「生徒・学生の学力低下に歯止めがかからない日本が今真剣に探るべきモデル」であることを示唆する。前述のように、既に日本においても、センター試験の資格試験的利用は将来の検討課題とされており、「大学教育に必要な能力・適性等を確保し、学生の大学教育への円滑な移行を図る観点からも」（前述平成11年中央教育審議会答申）、その早期の実現が望まれる。

しかしながら、センター試験の資格試験化は、国が進める大学の多様化・機能別分化と必ずしも相容れるものではなく、また、大学と高等学校の双方から教育の自由を奪うといった反論が予想されよう。また、選択科目を含む試験を公平に実施する等での技術的な問題も克服されていない³⁴。試験の公平性に関しては更なる研究が必要であろうが、前者については、大衆化された時代の高等教育の質保証の仕組みを整えて効果的に運用するのは国の基本的な責務であるという原点に立って（前述平成17年中央教育審議会答申）、当該仕組みの一環として実現されることが期待される³⁵。最低限の学力・適性をセンター試験で保証し、その上で各大学が入学者の選抜を行い、必要に応じて導入学習等の支援方策を講じる方が大学教育の質保証を図る上でも効果的であろう。

もちろん、フランスのバカロレアにも問題があり、とりわけ技術・職業バカロレア取得者に現れていることは上に述べた通りである。確かに、統一的な試験である程度の成績をとることを全ての高校生に期待することには限界があり、その程度が高ければ（例えば、普通バカロレア程度）、単なる選抜の道具になってしまうであろう。日本においてセンター試験を資格化するとしても、フランス同様に幾つかのコースに分けるなどして難易を付けることによって、高等教育の機会を広く確保することは不可能ではない。学力的に劣るコースの資格保持者が大学教育を受けるのは容易ではないかも知れないが、各大学ではそうした者向けのプログラム設定といった対応がし易くなるのではないだろうか。少なくとも、学力を全く考慮しないような推薦入学はなくなるであろう。

バカロレア試験やそれに関連する調査研究から得られた知見は、学習歴や学習手法の影響、教科間によって異なる学習効果、社会階層差に基づく不平等など、日本に示唆することは少なくない。例えば、日本においても、一部の難関校については、受験に適した教育

34 「共通テストはすべての試験科目を共通にして同じ条件下で実施するのがもっとも容易である。実施形態がそれから離れれば離れるほど、技術的問題は増加し調整は困難になる。残念ながらセンター試験の技術水準は現在の制度を保証できるほどに高くないのである。」（荒井, 2005b : 41-42）

35 荒井（2005b : 52）は、米国の例を引きつつ、「高等教育が普遍化し国民全体に及んでくるとなれば、連邦、州政府による初等中等教育への関与はさらに強くなり、また高等教育準備としての教育の標準化が求められる。今日の産業、経済が先端的な科学技術に強く依存し、高度な知識、技能を必要とする限り、学校システムへの国の関与は一層大きくならざるを得ない」と述べる。

を受けさせることができる裕福な家庭の出身者で占められる傾向があるとされるが³⁶、このような研究は最近まで余り注目されず、フランスと比較して蓄積が少ない。また、本文では言及しなかったが、近年の中等教育の改革に合わせたバカロレアの改革も興味深い。すなわち、中学校(collège)における「発見学習(itinéraires de découverte)」や高校における「指導付個別課題学習(travaux personnels encadrés : TPE)」といった教科を超えた、我が国の総合的な学習の時間に通ずる学習形態の導入とそれに対応したバカロレア試験科目の導入である³⁷。これらについては、稿を改めて報告することとしたい。

参考文献

- 荒井克弘(2005a)「入試選抜から教育選抜へ」荒井克弘・橋本昭彦編著「高校と大学の接続 入試選抜から教育接続へ」玉川大学出版部、9-16.
- 荒井克弘(2005b)「入試政策から接続政策への転換」荒井克弘・橋本昭彦編著「高校と大学の接続 入試選抜から教育接続へ」玉川大学出版部、19-55.
- 荒井克弘編(2003)『高校と大学の接続—選抜主義から教育接続へ—』東北大学大学院教育学研究科.
- 大場淳(2004a)「フランスの大学における「学力低下」問題とその対応」広島大学大学院教育学研究科紀要第三部/第52号、371-380.
- 大場淳(2004b)「フランスの大学における学生支援—進路指導並びに大学情報・進路指導センター(SCUIO)の活動を中心に—」大学論集第34集、41-61.
- 大場淳(2005a)「欧州高等教育圏創設とフランスの対応—新しい学位構造(LMD)の導入を巡って—」大学論集第35号、171-192.
- 大場淳(2005b)「フランスにおける大学教育の質的保証に関する一考察 — 国家学位と認証制度(habilitation)を中心として —」広島大学高等教育研究開発センター COE 研究組織 班質的保証研究会平成17年2月14日。(http://home.hiroshima-u.ac.jp/oba/で入手可)
- 刈谷剛彦(2001)『階層化日本と教育危機—不平等再生産から意欲格差社会へ』有信堂高文社.
- 大膳司(2005)「高等教育アドミッション論」有本章・羽田貴史・山野井敦徳編『高等教育概論』ミネルヴァ、41-56.
- 藤井佐知子(2005)「フランスにおける接続問題」荒井克弘・橋本昭彦編『高校と大学の接続 入試選抜から教育接続へ』玉川大学出版部、277-294.
- 耳塚寛明(2002)「学力問題と社会階層差：高階層ほど有利な学習環境」10月25日付日本教育新聞.
- Cour des Comptes (2003) *La gestion du système éducatif*. Journaux officiels, Paris.
- Danvers F. (2003) *Le baccalauréat : Un analyseur de l'évolution des politiques éducatives et des transformations du système d'enseignement aux XX^e siècle*. Colloque UNESCO-AFIRSE 29-31 mai.

36 刈谷 (2001 : 135-136) 「受験エリートたちの出身階層に目を向けると、戦後一貫して、恵まれた階層の出身者であった。・・・親の学歴も職業の威信も高く、収入の多い家庭の出身者によって、東大のような大学は占められてきたのである。」、耳塚 (2002) 「高学歴の家庭では、幼少時からのさまざまな文化接触の機会が豊富で、低階層の子供たちに較べて少ない努力で高い学力を獲得することが可能となります。努力以前に、あらかじめ学力の獲得において優位に立っているのです。」など。

37 藤井 (2005 : 289-290) 参照。

- Direction de l'Évaluation et de la Prospective (DEP) (2003) *l'état de l'École - numéro 13 édition 2003*. Ministère de l'Éducation, Paris.
- Direction de l'Évaluation et de la Prospective (DEP) (2004a) *l'état de l'École - numéro 14 édition 2004*. Ministère de l'Éducation, Paris.
- Direction de l'Évaluation et de la Prospective (DEP) (2004b) *Repères: Références statistiques sur les enseignements, la formation et la recherche édition 2004*. Ministère de l'Éducation nationale, Paris.
- Direction de l'Évaluation et de la Prospective (DEP) (2004c) *Que deviennent les bacheliers après leur baccalauréat? Évolutions 1996-2002*. Note d'information 04.14. Ministère de l'Éducation nationale, Paris.
- Direction de la Programmation et du Développement (DPD) (2000) *Les facteurs de réussite dans les deux premières années d'enseignement supérieur*. Note d'information 00.25, Ministère de l'Éducation nationale, Paris.
- Fourcade B. & Haas J. (2002) *L'université moins attractive? Les transformations récentes de l'accès à l'enseignement supérieur en France et en Allemagne*. LIRHE, Toulouse.
- Gruel L. (2002) Les conditions de réussite dans l'enseignement supérieur. *OVE Infos - La Lettre de l'OVE* numéro 2 - avril, 1-8.
- Michaut C. (2004) L'évaluation de la réussite en premier cycle universitaire. *Pratiques pédagogiques dans l'enseignement supérieur: enseigner, apprendre, évaluer*. édité par Annoot E. et Fave-Bonnet M.-F. L'Harmattan, Paris. 223-250.
- Ministère de l'Éducation nationale (MEN) (2003) *Rapport d'activité ministériel 2002-2003*. MEN, Paris.
- Mission d'information sur l'information et l'orientation des étudiants des premiers cycles universitaires (1996) *S'orienter pour mieux réussir*. Rapport 81-1996/1997, Sénat, Paris.
(<http://www.senat.fr/rap/r96-81/r96-81.html>)
- Romainville M. (2002) *L'évaluation des acquis des étudiants dans l'enseignement universitaire*. Haut conseil de l'évaluation de l'école, Paris.
- Vasconcellos M. (2004) *Le système éducatif 4ème édition*. La Découverte, Paris.